

【登場人物表】

美瑞 麗華（20） 大学2年生
美瑞 富幸（45・10） 大企業のCEO・麗華の母
美瑞 誉（45） 専業主夫・麗華の父
美瑞 汰嘉羅（17） 高校2年生・麗華の弟
KAZU（20） フリーター
三水 太郎（45・10）フリーター
三水 花子（45） 太郎の妻
三水 一（70） 太郎の父
店主（54） 釣具屋の経営者
バイト君（21） 釣具屋の店員
盛岡賢史（48） 麗華の大学の教授
助手A（29） 盛岡の助手
友人A（20） 麗華の友人
運転手（57） ハイヤーの運転手
船長 宇宙人・宇宙船の船長
船長の夫 宇宙人
船長の娘 宇宙人
副船長 宇宙人・船長の部下
副船長の妻 宇宙人
副船長の息子 宇宙人
上官（42） 鎌倉幕府軍の武将
兵士（23） 上官の部下
センター長（39） 太郎のバイト先の上司
少年A（10） 太郎のクラスメイト
少年B（10） 太郎のクラスメイト
中年男（50） 美瑞家の近所の住人
主婦A（36） 麗華のバイト先の従業員
主婦B（35） 麗華のバイト先の従業員
主婦C（34） 麗華のバイト先の従業員
店長（40） 麗華のバイト先の責任者
ベルボーイ（25） ホテルの従業員

○ 釣具屋・店内

T『2020年 11月』

都内の商店街にある釣具屋には釣り用品が所狭しと並べられていて、レジ横には『新型コロナウイルス感染予防対策実施中』のポスターが貼ってある。

レジにはマスク姿の男性店主（54）がいて、ペンで餌用ミミズのPOPを書いている。

ミミズが這った様な下手な字だが、店主はご機嫌でペンを走らせている。

店主「……ミミズによる三による三による三による、合わせてによるによる六によるによる」

そこへ同じくマスク姿のバイト君

（21）がやって来る。

店主「ミミズによるによる三によるによる」

バイト君「合わせてびよこびよこ六びよこ」

店主「（手が滑る）な、なんだよッ！ 失敗

しただろがッ！ てかカエルだろソレッ！」

バイト君「さーせーん……あの、コイツら生きてますけど、餌やらなくていいんすか？」

バイト君の手にはミミズが入った箱。

店主「要らねーよ。そんなに土入ってんだろ。

ヤツらはそれ食ってっから」

バイト君「え、つ、土をッ？ マジすか」

店主「で、体内で綺麗にして排泄するんだ」

バイト君「え、見分けつくんすか？ 土と糞」

店主「つくだろ。視力無い分感覚鋭いから」

バイト君「ヤバ。意外にスペック高っ」

店主「それに雌雄同体で子孫残し易いし、皮膚呼吸で肺も無いから体もコンパクトだろ」

バイト君「そーなんだ……でもいくらハイス

ペックでも皮膚呼吸だけはマジ勘弁っす」

店主「ハ、なんでだよ？」

バイト君「だって人間なら絶対窒息でしょ。

特に今のご時世は（と、窓の外を見る）」

店の前の道には晩秋の装いで全身を

覆い、さらにコロナ対策で顔にマス

クも着けた曇り顔の人々の姿。

店主「……なるほど、窒息間違いないな」

溜息交じりに窓の外を見つめる店主。

バイト君「……なんでこんな事になっちゃつたりたんすかね。釣りはアウトドアだからこの店はまだいいけど……」

店主「ああ……まだ休業中のままだっけ？

親が経営してるちっさい映画館」

バイト君「はい。親はもう諦めて破産手続きするって……」

悲し気にうつむくバイト君。

バイト君「……コロナって結局人災だと思いません？ 発生時は天災だったとしても」

店主「え、人災？」

バイト君「だって人間じゃないすか、経済回すって言うってウイルスも世界中に回したの」

店主「まあ、そうだけど……しょうがねーよ、どんなに恐ろしいウイルスがいたってまず金と密にならねーと生きていけねー世界作ったのは人間自身だからな……でもお前コメデイ映画の監督志望なんだろ？ ならこういう時こそ笑いで世の中明るくしねーと」

元気づけようと作り笑顔で笑う店主。

バイト君「ハア？ コロナ禍でコメデイ？

不謹慎でしょ、大勢の人亡くなってんのに」

店主「ま、まあ、そりやそうだけど……」

気落ちした店主がふとバイト君の手

にしたミミズの箱を見てハッとすする。

店主「じゃ、じゃあミミズが主人公なら？

肺炎なんか無縁だろ、元々肺がねーんじゃ」

バイト君「え、ミ、ミミズを……？」

店主「そう。そりや皆不謹慎に感じるだろ、

人間を主人公にしたらどーしても。だから

この時代を生き抜くのに必要なスペックを

全て備えたヤツらの特徴生かしてさ」

バイト君「え……いや、やつは無理っすよ、

コロナで笑いは。人類史に残る伝染病すよ」

店主「ん……ならなるべくでいーよ、笑いは。

頼む。いつもみたいに物語聞かせてくれよ」

バイト君「で、でもミミズが主人公って……」

店主「じゃ、じゃあミミズ人間とかどうだ？

不謹慎じゃねーだろ、想像上の生物なら」

バイト君「え、ミ、ミミズ人間？ まあ、それなら確かに不謹慎感減るかもすけど……」
バイト君はためらいながらも手にしたミミズの箱を見つめて考え始める。

○ 豪邸・外観（※バイト君の想像始まり）
晩秋の日差しを浴びる大豪邸の全景。
立派な門には『美瑞 MIMIZU』
と書かれた大理石の表札がある。

○ 同・部屋

広い部屋の大きな机には2020年11月の卓上カレンダーがある。
その横にあるパソコンの前には外見は美人お嬢様女子大生風の美瑞麗華（みみずれいか・20）がいる。

麗華は何故か季節外れの半袖姿でそのくせエアコンの暖房はつけている。
PC画面には教授の盛岡賢史（48）が映っていて、オンライン授業中だ。

盛岡「……じゃあ、今日の授業はここまで」
麗華は『中世日本史概論』の教科書を閉じるとおもむろにコンタクト用の目薬を差す。

盛岡「じゃ、画面消しといってくれ」

傍でPC作業中の助手に頼んで席を立つ盛岡だが助手は耳にイヤホンを
していて全く気付かない。

そこへ別の助手A（29）が来る。

助手A「盛岡教授、このレポート見て下さい」
ノートPCの画面を見せる助手A。

盛岡「……みみず……美瑞麗華のレポートか」
麗華は「え、私……？」とまだ点いたままのPC画面を覗き込む。

助手A「はい。それが鎌倉時代の元寇を追い
払った神風は宇宙人の仕業だって書いてて」

盛岡「ハア？ なんだソレ。ふざけんのはア
ニメみたいな名前だけにしろよな、ハハハ」

麗華は思わずムツとして画面を覗む。

助手A「ミミズは外れですよ、苗字ガチャ」

盛岡「だな。いくら親が大企業のCEOでも

苗字がな……まあ、女だからさっさと結婚

しちゃって苗字変えられるからいいけどよ」

助手A「ダメですよ教授、今時そーいうの」

盛岡「え、コレもダメ？ めんどくせーな」

助手A「時代ですから、今はそーいう」

盛岡「ハア？ 今は今はって皆言うけど時代

ってのは昔から何も変わらねーの。だって

平安時代の書物には既に『最近の若者はけ

しからん』って記述があるくらいだからな」

助手A「え、マジすか？」

盛岡「ああ。それに世界で言うトエジプトの

象形文字にも既にそう書かれてたらしーぞ」

助手A「そーなんだ。てか評価どうします？」

盛岡「勿論再提出。というか試験も不可だ」

助手A「え、他は特に問題無いんですけど」

盛岡「知らん。留年しても俺には関係ねー」

冷たく言い放ち、去っていく盛岡。

麗華は睨み顔でPC画面を消す。

麗華「ク、クソッ！ なんも知らねーくせに。

てか相変わらず冷てーな、盛岡冷麺ッ！」

吐き捨てて勢いよく立ち上がる麗華。

その反動で卓上カレンダーが倒れる。

カレンダーの11月27日の欄には

大きな×印がある。

○ タイトル

『ミミズ族のG o T o お見合い』

○ 美瑞家・外観（夜）

明かりの灯る大豪邸の全景。

○ 同・麗華の部屋（夜）

麗華がまたパソコンの前にいる。

画面には酒を手にした友人A（20）

がいて、オンライン飲み会中である。

傍らにある麗華のスマホからは80

年代のシテイポップが流れている。

友人A「……マジか、そんな事言われたの？

やっぱ冷てーな、盛岡冷麺は」

麗華「そー、盛岡マジ嫌い。てか冷麺も」

友人A「まあ、実際食べると食感輪ゴムだし」

麗華「てか何で盛岡？ 韓国料理っしょ」

友人A「ソレ言うなら焼肉屋以外で見ねーし」

麗華「ショックハンパねーしな、温かいヤツ

かと思つて食べた時の」

友人A「それに冷麺好きに冷やし中華でしょ。

つて言うともチャキレてきてうぜーし」

麗華「てか、スイカ入れる店なくない？」

友人A「あるある。マジ意味分かんない」

麗華「だよな。あれシテイポップで言えば菊

池桃子とブラコンサウンドっていう『ラ・

ムー』ばりの異色の組み合わせだから」

友人A「(笑つて) ソレ分かるわー。てかさ、

いつになったらまた大学通えんだろね」

麗華「ホント、早く皆と会いたいよ。それに

家に居たつて出会いも無いし」

友人A「え、でも麗華見つけたんでしょ？

マツチングアプリでKAZUとかいう男」

麗華「ん、ま、まーね」

友人A「じゃあエイじゃん。何してる人？」

麗華「え、フリーターらしいけど」

友人A「え、マジで？ もつとちゃんとした

男にすれば？」

麗華「でもマジタイプなのー。それに明後日

までに彼氏がいる状況作つときたくて……」

カレンダーの×印をチラ見する麗華。

友人A「ハ？ 27日までに？ なんで？」

麗華「え、そ、それは……だ、だつて一日も

早く欲しくね？ 彼氏。(と、誤魔化す)」

友人A「ふーん……ま、上手くいくといーね」

麗華「あ、ありがと……じゃあ明日バイトで」

友人A「うん、じゃあねー(と、手を振る)」

笑顔で手を振り返す麗華だが画面を

消すと真顔に戻り、カレンダーの×

印を見て大きく溜息をつく。

○ ハイヤーの車内(朝)

翌朝になり、都内の住宅街を一台の
高級ハイヤーが走っている。

コロナ対策用の極太の亚克力板で仕切られた社内の後部座席には麗華と見た目はセレブ奥様風の美瑞誉（ほまれ・45）がいる。

二人共マスク無しで誉も麗華同様目が悪いようでメガネに半袖姿である。

○ 区役所・前の道（朝）

都内にある区役所の前にハイヤーが停まり、マスク姿の運転手（57）が丁寧に後部座席のドアを開ける。

運転手「いつてらっしゃいませ奥様、お嬢様」
車から降りる麗華と誉は半袖のままだが手にはカイロを握り、寒そうに体を震わせながら歩きだす。

○ 同・ロビー（朝）

長袖姿でマスクも着けた利用者達が感染対策で間を空けて座っている。

そこへ半袖姿でマスク無しの麗華と誉がマイナンバーカードの交付通知書を持ってやって来る。

二人のマスク無しで季節感も無い格好を見て思わず驚く他の利用者達。

そこへ女性職員（36）が来る。

職員「あのお、恐れ入りますがマスクを……」

誉「あ、で、ですよ。すいません」

慌てて高級そうなハンドバッグからマスクを2枚取り出す誉。

誉「ほら麗華、貴女も（と、マスクを渡す）」

麗華「ありがと、パ。パ」

見た目は女性の誉に麗華が「パ。パ」

と言ったのでギョッと驚く女性職員。

誉は誤魔化す様に通知書を見せる。

誉「ハ、ハハ……コレはどうしたらいいの？」

職員「あ、は、はい。（通知書の名前を見る）

……み、みみず様、マイナンバーカードの

受け取りでございますね」

思わずクスツと笑う他の利用者達。

麗華は思わずムツとする。

麗華「(女性職員に)あのッ、苗字変えるの
ってどこの窓口行けばいいですかッ？」

職員「え、ソレでしたら……」

誉「慌てて遮る」大丈夫。何でもないです」

職員「そ、そうですか。では順番が来るまで

椅子に掛けてお待ち下さいませ」

麗華は不機嫌そうにロビーの一番端
にある椅子に座る。

麗華「……マジ嫌なんだけど、この苗字」

誉「またそんな……いつも言ってるでしょ。

この苗字はね、明治時代に義務化された時

ご先祖様達が決めた尊いモノなのよ」

麗華「てかまんまじゃん。センス無さ過ぎ、

いくら体質がミミズと同じでもさ」

誉「麗華、ご先祖様を悪く言うんじゃないの」

息苦しそうにマスクに触れる麗華。

麗華「てかやっぱマスク苦し過ぎだつてッ！

あー、皮膚呼吸マジ辛いわー」

傍にいた子供が「え？」と振り向く。

誉「慌てて小声で」麗華、声大きいわよ」

麗華「だって餃子食べたら体全体から臭うし、

フリスク食べたって効きやしねーもん」

誉「人間の食べ物ばかり食べてるからよ。

私達は土があれば十分でしょ」

誉は傍にある観葉植物の鉢に敷き詰

められた黄色っぽい土に気付く。

誉「わ、鹿沼(かぬま)土じゃない。甘くて

美味しそー(笑顔でスマホを向ける)」

それを見て呆れ顔で溜息をつく麗華。

誉「色鮮やかねー。インスタにアップしとこ」

麗華「ハ？ 映えるスイーツみたいに言うな」

誉「私も観葉植物始めてみよっかなー。で、

ユーチューブにアップしたりして」

麗華「誰も思わねーだろーね、料理動画とは」

誉「でも、その前にヨガ動画ね。『ここでお

腹に力入れて深呼吸して下さーい』とか」

麗華「意味無いし、皮膚に力入れねーと」

誉「い、いいの。普通にしてればバレないわ」

麗華「でも昔さ、小学校の時の肺活量測定で

ゼロって出て学校中大騒ぎになったけど」

誉「そ、そうね……あの時は誤魔化すの大変だったわ……でも、おかげで肺炎なんて、コロナなんて全然怖くないでしょ」

麗華「……まーそーだけど」

誉「それと外でパパって呼ばないで。戸籍上は女性なんだから」

麗華「ゴメン……でも、本来男女両方の戸籍取れて当然じゃね？ 雌雄同体なんだから」

誉「それはね、見た目に合わせようって昔ご先祖様達が決めたの。そうしないと心無い人間達から差別を受けかねないでしょ。今私達が幸せに暮らせるのは皆ご先祖様達の大変なご苦労のおかげなのよ」

麗華「（呆れ顔で）またその話か……」

誉「特に私達美瑞家のご先祖様は本当にご立派だったのよ。とつてもとつても大きな船の船長さんでね……」

微笑んで手首にある色褪せた年代物の虹色のブレスレットを見つめる誉。

○ 宇宙船・コックピット（回想・夜）

T『鎌倉時代 文永十一年 博多湾上空』

宇宙船内のモニター画面には博多湾付近の地図が映し出されているが、画像は途切れ途切れで今にも消えてしまいうそうである。

その前には必死の形相で機器を操作する二人の宇宙人がいる。

見た目は人間の中年女性の様でどこか誉似の船長と人間の中年男性の様な副船長である。

二人共メガネ姿で服装は中性的なタングトupp風の上着と短パンである。

船長「（宇宙語なので字幕）ふ、副船長ッ！

なんとかもたせろ、目的地は近いぞッ！」

副船長「せ、船長ッ、ダメですわッ！ も、

もうコントロールが効きませんッ！」

見た目とは男女逆の言葉遣いで焦りの表情を浮かべる二人。

船長「ク、クソッ！ もう少し、もう少しで着陸出来るのにッ！」

悔し気にモニターをぶっ叩く船長。

その衝撃でモニターの画面が切り替わり、荒波に漂う木造の軍船が映る。

軍船の旗には『元』の文字、元寇だ。

船長「……な、なんだコレはッ？」

副船長「わ、分かりませんわ……でも同じ様な物体が無数にあつて。こ、このままだとそこへ突っ込みますわッ！」

船長「なにッ？ 皆の脱出状況はどうだッ？」

副船長「ほぼ完了したようですッ！ でも、

本当に大丈夫なんですよね？ この星は」

船長「大丈夫だ。調査では我々の体質に適合する結果が出ているッ！ 酸素もあるし、何より良質の土があるそうだからなッ！」

副船長「で、でもこの星の住人は争いを好む下等生物だという噂が……やはり武器を開発して持つて来るべきだったのでは？」

論すような表情で首を振る船長。

船長「……ダメだ、そんな事を言つては」

副船長「……え？」

船長「差別と争い、そして強欲……最も恥ずべき行為だ。我が民族はな有史以来ずつと『蔑まない、争わない、欲張らない』の幸せを叶える三原則を貫いてきたんだぞ」

副船長「そうでしたわね。すいません……」

船長「いいな、蔑みや武器や欲は滅亡を呼ぶだけ、我々には希望を呼ぶ美味しい土さえあれば生きていけるんだッ！」

副船長「はい、『NONO LIFE』でしたわねッ！」

笑顔でうなづき合う二人。

そこで機器の電源が落ちてしまう。

船長「も、もう限界かッ！ 脱出するぞッ！」

副船長「ハ、ハイッ！ 了解ですわッ！」

慌てて焦りの表情で席を立つ二人。

○ 同・脱出用ゲート（回想・夜）

小型の脱出カプセルが並んでいる。

カプセルの前には人間の中年男性の様な船長の夫と少女の様な船長の娘に中年女性の様な副船長の妻と少年の様な副船長の息子がいる。

同じ歳位の船長の娘と副船長の息子は仲良さ気に手を繋いでいる。

そこへ船長と副船長がやって来る。

船長「(驚いて) お、お前達ッ！ ま、まだ脱出してなかったのかッ？」

船長の夫「ええ、出来ないわッ！ 貴方達をおいて私達だけ先に脱出するなんてッ！」

船長「お、お前…… (涙ぐむ)」

副船長「でも船長、この残ってる小型タイプでは6人一緒に乗るのは無理ですわッ！」

船長「……しようがない、家族で分かれよう」
副船長の息子「嫌だッ、一緒に行きたいッ！」

副船長の妻「駄目。3人ずつしか乗れないの」
船長の娘「イヤッ、一緒に行くッ！」

思わず泣き出す船長の娘。

それを見た副船長の息子が真新しい虹色のネックレスを首元から取って

中央の連結部分を外して二つに分離させ、片方を船長の娘の手首に巻いて

ブレスレットにする。

それを見て泣きやむ船長の娘。

船長の娘「……いいの？ 大事なモノでしょ」
副船長の息子「大丈夫、必ずまた会えるから。」

その時にまた繋ぎ合わせればいいよ」

船長の娘「でも別れたくない。絶対嫌だよ」
副船長の息子「……いや、いいんだよそれで」

船長の娘「……え？」
副船長の息子「だって雨が降らないと出ない

だろ？ 綺麗な土を泥に変えてしまう雨の終わりを告げる僕らの希望の虹も。嫌な事

の後には必ず幸せな事が待ってる。だからまた会えた時に虹を架けよう、僕らの間に」

微笑んで分離させたもう片方を自分の手首にも巻く副船長の息子。

船長の娘は涙目ながらもうなづく。

船長「さ、さあ、皆急ごうッ！」

副船長「また一緒に暮らしましょうね、必ず」
引き締まった表情でうなづき合って
カプセルに乗り込む二家族。

○ 海岸の松林（回想・翌朝）

松林の木の陰に鎌倉幕府軍の偵察兵
（23）とその上官（42）がいて、

朝日を浴びる穏やかな海を見ている。

上官「驚いて……ま、ま……じやの……」

兵士「はいッ！ 元の、元の船はどこにもお
りませぬッ！ 皆消え去ったようですッ！」

上官「……さ、昨夜の嵐のおかげ……いや、

か、神風じゃ、神風が吹いたんじゃーッ！」

兵士「え、か、神風でございますかッ？」

上官「そうじゃッ！ 我らを救って下さった
んじゃ、神様が天から降りて来てなーッ！」

○ 砂浜（回想・朝）

穏やかな波が打ちつける砂浜に脱出
カプセルが漂着している。

その傍には船長一家がいるが船長は
焦り顔で濡れた通信機器らしき物を
操作している。

船長の夫「……どう？ やっぱ通じない？」

船長「ああ。おかしいな、防水なんだが……」

怪訝な顔で海の水を舐めてみる船長。

船長「か、辛い……そうか、確か調査だところ
の星の海は真水ではなかったな……」

船長の娘「……ねえ、皆はどこにいるの？」

答えに困って顔を見合う船長夫婦。

船長「だ、大丈夫だ。きつといるはずだから、
きつと、きつと近くに……」

察した船長の娘は手首の虹色のブレ
スレットを見つめて涙を滲ませる。

船長「結局船を失い、数万人いた乗員もバラ
バラに……本当にこれで良かったのか……」

船長の夫「な、何言うのッ！ 宇宙船で星を

脱出してなければ皆今頃巨大な隕石の衝突
の衝撃で死んでたのよッ！ 皆貴方に感謝

してたんだからッ！」

船長「……そうか、そう言って貰えると……」
思わず涙ぐむ船長。

船長の夫「……だからなんとしてもこの星で
生き延びて子孫を残していかないと……
この最高に美味しい空気のある星でね」

おもむろに服を脱ぎ、上半身裸にな
って肌を露出する船長の夫。

船長「そ、そうだな。なんて美味いんだ……」

船長も裾を捲ってさらに肌を出す。

船長の夫「それに見事だわ、この星の土は」

陸地を見て微笑む船長の夫。

船長「本当だ。あんなに肥沃な土が……ああ、
なんて美味そうなんだ……」

そこで船長の娘のお腹が「ぐぐ」と
鳴る。

船長の夫「なによ、はしたないわね」

船長の娘「ご、ごめんなさい……」

そこへ先程の上官と兵士が小走りで
やって来る。

気付いて驚く船長一家。

船長「……こ、この星の住人か……?」

船長の夫「す、凄い、本当に私達に似てるわ」

船長「ああ。長年調査した甲斐があったよ。

広大な宇宙でここだけだったからな、こん
なに好条件が揃った星は……」

船長一家に気付いた上官と兵士は怪

訝な顔で近づき始める。

上官「……な、なんだ、この者達は……?」

兵士「げ、元の兵士ではなさそうですが……」

用心して刀を抜く上官達。

船長の夫「(驚く) あ、あれは武器じゃ?」

船長「や、やはり争いを好む心の醜い者達

なのか、この星の住人は……」

刀を構えながら近寄る上官達。

兵士「し、しかし、奇妙な格好ですね……」

上官「うむ。まことに不思議な奴等じゃ……」

そこで脱出カプセルの故障した機器

から煙が上がり、傍にいた船長一家

は白い煙に包まれる……と、その幻

想的な見た目にハッとする兵士。

兵士「ま、まさか、か、か、神様ではッ？」
上官「なに？ 確かに神風とは言ったが……」
兵士「きつとそうに違いありません。あのいで立ちはこの世の者とは思えませぬッ！」
上官「な、なにをたわけた事を……（ハッと
思いつく）……そうか、そういう事にして
鎌倉まで連れて行けばきつと褒美が……」
兵士「ま、まことにございますかッ？ な、
ならば拙者がお連れ申すッ！」

慌てて駆け出す兵士。

上官「待てッ！ ワシが見つけたんじやッ！

褒美は、神様のご利益はワシの物じゃッ！」

卑しい笑みを浮かべながら負けじと

駆け出す上官。

満面の笑みで近づいて来る上官達を

見てホッとする船長一家。

船長の夫「か、歓迎されてるようね……」

船長「ああ、警戒していただだけのようだ……

実際は心が綺麗な者達なんだろうな……」

○ 森（回想・朝）

朝日が差し込む森の中に土に半分埋

まった脱出カプセルがある。

その傍には副船長一家の三人がいて、

悔し気な表情の副船長が通信機器ら

しき機械を投げ捨てる。

副船長「ダメだわッ、全然反応しないッ！」

副船長の妻「壊れたようね、衝撃で……」

副船長の息子「大丈夫かな？ 他の人達」

副船長の妻「大丈夫。同じ様に助かってるわ」

副船長「だといいけど……」

副船長の妻「それより見て、この土を」

屈んで土を掴む副船長の妻。

副船長の息子「うわ、凄くいい匂いッ！」

副船長「ほ、本当ね。たまらないわ……」

副船長の妻「空気も美味しいし、まるで天国

じゃない。苦労して来た甲斐があったわ」

副船長「そ、そうだわ。NO 土 NO L

IFE、土さえあれば生きていけるわッ！」

言うや否や土にかぶりつく副船長。

妻と息子も笑顔で土を食べ始める。
そこへ木々の間から鎌やクワを持つ
た農民A(35)と農民B(34)
と農民C(33)達数名が現れる。
気付いて手を止める副船長一家。

副船長「……こ、この星の住人らしいわね」

農民達は怪訝な表情で近づく。

農民A「……な、なんだコイツら……？」

農民B「に、人間みてーだけどな……」

農民C「いや、ちよつと違わねーか？ 変な

着物着てるし……手に持ってるのは何だ？」

目を凝らした農民Cが副船長一家が
土を食べていることに気付く。

農民C「つ、土食ってるぞコイツらッ！」

農民A「な、なにッ！ そんな汚ねーヤツら

は人間じゃねーッ！ きつと妖怪だッ！」

農民B「いや、お、鬼だ、鬼ッ！ で、出て

行けッ！ 二度と村に来るんじゃねーッ！」

蔑んだ表情で農具を振りかざして襲
い掛かる農民達。

副船長「ま、まずいわッ、逃げるのよッ！」

慌てて逃げ出す副船長一家。

妖怪だ鬼だと叫びながら追う農民達。

副船長の妻「や、やっぱり争いが好きな下等

生物達じゃないッ！ た、助けてーッ！」

叫びながら逃げる副船長一家。

副船長の息子は手首のブレスレット

を大事そうに握り締めながら逃げる。

○ 区役所・ロビー(朝)

現代に戻り、カウンターで作業をし

終えた女性職員が立ち上がる。

職員「みみず、みみずほまれさーん。みみず

れいかさーん」

またもクスクスと笑う他の利用者達。

麗華はまたムツとして立ち上がる。

○ 同・出口(朝)

眷とイラつき気味の麗華が出て来る。

二人の手にはマイナンバーカード。

誉「(体を震わせて) さ、さむッ。やっぱりもう半袖じゃ無理ね……」

麗華「クソ、もう嫌この苗字……てか本当に必要あんの？ マイナンバーカードなんか」

誉「あのね、こういうのは率先してやるの。」

出来るだけ普通の住民と思わせる為にね」

麗華「そーいうことか……じゃあ、私買い物してくからパパ先帰ってて」

誉「そう、なるべく早く帰って来るのよ」

麗華「え、何で？」

誉「だってママと相談しないと……明後日のお見合いのこと」

思わず顔を曇らせる麗華。

麗華「……すること無いし、相談なんか」

誉「え、またそんなこと……」

麗華「(遮って) 行かないって言ったでしょ、

ミミズ野郎とお見合いなんかッ！ てか

自分で見つけるって、結婚相手ぐらいッ！」

吐き捨てて仏頂面で去って行く麗華。

誉は困り顔で立ち尽くす。

○ 美瑞家・外観

午後の日差しを浴びる大豪邸の全景。

○ 同・リビング

広くて綺麗なリビングの壁には20

20年11月のカレンダーがある。

その隣には『NO 土 NO LI

FE』と書かれた立派な掛軸もある。

その上にはエアコン、その下にはス

トープ、どちらも絶賛稼働中だ。

大画面テレビにはコロナの話題を扱

う午後のワイドショーが映っている。

その前の本革のソファーには険しい

表情の美瑞富幸(45)がいる。

見た目は普通の中年男性だが服装は

ランニングシャツに短パンである。

大きなテレビラックの上には富幸が

表紙を飾った数冊の経済情報誌がデ

イスプレイされている。

その中央の表紙には『美瑞ホールディングス・美瑞富幸CEOが語るコロナ禍の世界経済の未来』の文言。富幸もメガネ姿だがさらに目を凝らしながらテレビを見ている。

画面にはマスク姿で街を行き交う人々と『第3波到来か?』の文字。

富幸「まずい、まずいぞこれは……なんとか早く済ませないと……」

険しい表情で壁のカレンダーを見る富幸。11月27日の欄には『麗華・お見合い』の文字。

○ 繁華街の道

ブランドショップが立ち並ぶ繁華街。その歩道を半袖姿の麗華が寒そうに体を震わせながら歩いている。

そこへ前からカップルがやってくる。温い服装で楽し気に体を寄せ合って歩く二人を羨まし気に眺める麗華。そこでふと横を見るとブランド店のショーウインドーに純白で上品な長袖のウエディングドレスがある。

思わず駆け寄る麗華。

麗華「あー、やっぱロングスリーブだなー。

上品だしロイヤル感ハンパないわー」

笑顔でドレスを見つめる麗華だが、ふとガラスに映った半袖姿の自分に気付いた途端に顔を曇らせる。

うつむき加減で寂し気に店から離れてスマホを見ながら歩き出す麗華。画面はマッチングアプリの名前占いで、アカウント名は『REIKA』。占い結果は『貴方の運命のお相手は……とても地味なお名前の方です』。

麗華「マジか……てかまだ本名聞いてねーなそこへアカウント名『KAZU』から『今夜ビデオデートしませんか?』というメッセージが届く。

麗華「(目を見開いて)キ、キターッ!」

○ 美瑞家・前の道（夕方）

美瑞家の高い塀に西日が差している。
そこへアパレルショップの紙袋を提
げた麗華が鼻歌交じりで帰って来る
が、家の前まで来た途端に曇り顔に
なり、溜息と共に門に入って行く。

○ 同・リビング（夕方）

テレビにはコロナの感染者数を伝え
る夕方のニュースが映っている。

ソファーには富幸がいて、未だに陰
しい表情でテレビを見ている。

そこへキャミソールと短パンに着替
えた誉が紅茶を運んでくる。

富幸「……お、この間買った紅茶か？」

誉「うん。いつものより2千円高かったけど」

微笑んで紅茶をテーブルに置く誉。

富幸は誉の手首にある虹色のブレス
レットを見つめる。

富幸「……一体どこにいったんだろな？」

誉「え、何が？」

富幸「そのブレスレットの片方だよ。昔は一本
のネックレスだったって話なんだろう？」

誉「……もう見つからないわ。ご先祖様達は

地球に來た時世界中に散らばったようだし」

富幸「でもそれも今では滅亡の危機か……」

誉「大体の皆様は迫害を受けたって話だから

……運が良かったのよ、私達のご先祖様は」

富幸「想定外だっただろうな、青くて綺麗な

星の住人の心がどす黒くて醜かった事は」

そこへ麗華が入って来る。

麗華（誉に）「ただいま、パパ」

誉「麗華、（富幸を指さして）ママには？」

フン、と無視してソファアの富幸か

ら一番離れた場所に座る麗華。

富幸「見えなかったんだろ、目悪いからな」

誉「また嫌み言って……自分も目悪いのに」

そこへ同じくメガネ姿の美瑞汰嘉羅

（たから・17）が入って来る。

見た目は普通の男子高校生だが服装は海パンだけである。

麗華「汰嘉羅やめてって、そのカッコツ！」

汰嘉羅「いーだろ。呼吸すんの楽なんだから」

麗華（誉に）「パパ、なんとか言っつてよ」

誉「いいじゃない、育ち盛りなんだから」

富幸「そうだ酸素優先だ。オシヤレよりもな」

嫌みつぽく麗華の紙袋を指さす富幸。

麗華「また嫌みか…マジ最悪だこの家」

富幸「それよりコロナだ。もう無理そうだぞ、

マスク無しで外出するのは」

汰嘉羅「え、ヤバいって。もう外寒いから」

誉「そうよ、酸欠で死んじゃうわ。全身服で

覆うのにマスクで顔までなんて…」

富幸「でもマスク無しでは周りの目がな…」

誉「そ、そうね。困ったわ…」

汰嘉羅「全然怖くねーのにな、コロナなんか」

そこでニュースが天気予報になり、

週間天気予報では明後日の11月2

7日の最高気温は13度である。

麗華「うわ、明後日メツチャ寒いじゃんツ！

これじゃ中止だね、お見合いはツ！」

嬉しそうに高級そうな棚の上にある

『御招待状 美瑞家様』と書かれた

封筒を見る麗華。

富幸「な、何言ってんだツ！絶対やるに決

まってるんだろツ！滅亡の危機が迫ってる

んだぞツ！我がミミズ族にはツ！」

麗華「や、やめてよその呼び方ツ！てか、

無理だつてツ！13度なんて絶対長袖

じゃん。マスク着けたら窒息するつてツ！」

富幸「大丈夫だ、いつものハイヤー使うから。

アレには特注の仕切りがあるからな」

誉「そうね、あの車ならマスク要らないわ」

麗華「で、でも会場のホテル着いたら？」

富幸「ん？そ、それは…」

汰嘉羅「あ、フェイスシールド使えば？」

誉「駄目よ、シールドが息で曇らなかつたら

口呼吸じゃないってバレるでしょ」

麗華「ほら無理じゃん。絶対中止だねツ！」

富幸「いやダメだッ！ 絶対行くんだッ！

しきたりで決まってるって言っただろ、

20歳になる年の332日目に将来結婚する相手とお見合いするってなッ！」

麗華「嫌だってそんなのッ！ しきたりとかもうそーいう時代じゃないからッ！ あの宝塚だって先輩が乗ってる電車にお辞儀しなくてもよくなっただからッ！」

富幸「なんだとッ！ 我々のしきたりはな、ピアスは開けてもいいけど着けてはダメとかいうバカな下等生物の人間が作ったブラック校則とは訳が違うんだぞッ！」

麗華「一緒だって、変なのはッ！ てかこんなの絶対しきたりハラスメントじゃんッ！ 全然立派じゃねーし、ご先祖様なんかッ！」

富幸「違うッ、昔は自由恋愛だったんだッ！」

麗華「え、じゃあなんでしきハラなんかッ？」

富幸「近代以降ミミズ族が減ってきたからだ。それでなんとか子孫を残す為にご先祖様達が苦渋の選択で決めた策なんだッ！」

麗華「知るかッ！ 私は自分で見つけるから、結婚相手ぐらいッ！ 幸せぐらいッ！

てかどう行く気ッ？ マスク無しでッ！」

富幸「ん、んん……（少し考えて）……汰嘉羅、試しにコート着てマスクも着けてみる」

汰嘉羅「え、嫌だッ、絶対窒息するってッ！」

嫌がる汰嘉羅にコートを着せる富幸。 誉も靴下を履かせる。

汰嘉羅「顔をしかめて）い、息苦しい……」

富幸「大丈夫、今まで裸でいたからだッ！」

無理やりマスクもはめる富幸……
……でも汰嘉羅は何とも無さそうだ。

富幸「……なんだ、大丈夫そうじゃないか」

汰嘉羅はホッとして微笑むが、次の瞬間苦悶の表情に変わる。

汰嘉羅「う……く、く、やっぱ苦しいッ！」

慌ててマスクを剥ぎ取り、コートも脱ぎ捨てて床にぶっ倒れる汰嘉羅。

誉「だ、大丈夫ッ？ 汰嘉羅ッ！」

富幸「（肩を落として）だ、駄目か……」

麗華は一人ホッと胸を撫で下ろす。
そこでインターホンが鳴る。

ハッとして出る富幸。

富幸「ご苦労様。そこへ置いておいて下さい」

○ 同・玄関（夕方）

フランス語が書かれた段ボールを置き、足早に立ち去る宅配業者の後姿。

○ 同・リビング（夕方）

そそくさと玄関に向かう富幸。

誉「きつと頼んでたスイーツよ。気分変えてお茶にしましょ」

麗華「まあいいけど……てか何のスイーツ？」

誉「微笑んで」今キテるものらしいわよ」

麗華「え……まさかバスクチーズケーキ？」

途端に険しかった麗華の表情が緩む。

段ボールを抱えた富幸が戻って来る。

富幸「（笑顔で）来た来た。わざわざうちの

フランス支社に取り寄せさせたんだぞ」

麗華「え、フレンチバスケット？ 絶対そうだ」

富幸は笑顔で段ボールを開け、2つ

入っている箱の片方を開ける。

中身は小さめの瓶の詰め合わせ。

瓶に入っているのは………土だ。

途端に麗華の顔から笑みが消える。

富幸は満面の笑みで瓶を取り出す。

富幸「同じ土だぞ、ベルサイユ宮殿の庭と」

誉「やっぱり高級よね、瓶のほうが」

麗華「（睨んで）プリンみたいに言うなッ！」

富幸「しかもな、1990年物らしいぞ」

誉「凄い、当たり年じゃないッ！」

麗華「ワインみたいに言うなッ！」

汰嘉羅「じゃ、頂きまーす」

もう一つの箱に手を伸ばす汰嘉羅。

富幸「ダメだ。今はこっちの箱だけにしろ」

瓶を汰嘉羅に渡す富幸。

富幸「ほら麗華も食べろ（瓶を差し出す）」

麗華「（睨んで）食えるか、泥なんかッ！」

富幸「（ムツとして）違う、『つち』だッ！」

麗華「食べたかったな、バスクチーズケーキ」
誉「干からびて道で行き倒れ状態になるわよ、人間の食べ物ばかり食べてると」

食べながら瓶のラベルを見る汰嘉羅。

汰嘉羅「わ、A5ランクか。だと思った」

誉「イイ具合にサシ入ってるもん、落ち葉の」

麗華「霜降り肉みたいに言うなッ！」

富幸「炙ってもイケそうだな」

誉「そうね。漬けにしてもいいかも」

麗華「高級寿司みたいに言うなッ！」

汰嘉羅「そう言いながら好きなくせに」

麗華「だ、誰が好きなんもんか、泥なんかッ！」

富幸「聞いたぞ、夜中に食べてんだって？」

麗華「ハ？ 汰嘉羅、お前言うなって……」

バツが悪そうに顔を逸らす汰嘉羅。

誉「駄目よ、ソレが一番太るんだから」

麗華「シメのラーメンみたいに言うなッ！

てか好きで食べてんじゃねーッ！」

そこへ「ぐぐ」と麗華の腹が鳴る音。

思わず「しまった」と顔をしかめる。

汰嘉羅「ムリすんなって、食べたいんだろ？」

ニヤけ顔で瓶を差し出す汰嘉羅。

麗華「クソ、あー人間に生まれたかったッ！」

富幸「やめとけ。人間みたいに差別的で争いと

欲望にまみれた下等生物なんか」

誉「そ、士だけだもんね、私達に必要なのは」

壁の『NO 土 NO LIFE』

の掛軸を見て微笑む誉。

汰嘉羅「欲が無いからねー、人間と違って」

麗華「おかげで視力もほぼ無いけどなッ！」

富幸「性差別も無いぞ。(誉に)なあ。パパ」

誉「ジェンダーレスだもんね、ママ」

麗華「そーいう生体だろ。意識高いふりすな」

富幸「環境にも優しいぞ。人間と違ってな」

誉「私達が綺麗にしてるしね、ご近所の土は」

汰嘉羅「いっぱい食べていっぱい出さないと」

麗華「勝手に蒔くな、うちのウンコッ！」

富幸「何言ってるんだ。昔からミミズさん達と

ご先祖様達が綺麗にしてきたんだぞ、環境を壊しまくってきた人間共が汚した土を」

誉「(声優の島本須美風に) そう……汚れてるのは土なんですッ!」

麗華「ナウシカみたいに言うなッ!」

富幸「最高の名作だぞ。キラキラネームで

お前の名前にしようかと思ったくらいだ」

麗華「もう十分だ、こんなアニメみたいな

名前ッ! 人間と結婚して変えてやるッ!」

富幸「な、なにをバカなことをッ!」

誉「そうムリよ、生きていけないわッ!」

汰嘉羅「即離婚だし、嫁が夜中土食べてたら」

面白がって笑う汰嘉羅を睨む麗華。

麗華「ク、クソッ! チクリ野郎が……」

汰嘉羅「てかいるんですよ。いい感じの男、

マッチングアプリで出会った人間の」

富幸「な、なに、本当かッ?」

麗華「な……お、お前、なんで知って……」

汰嘉羅「聞こえたから、友達と話してんの」

麗華「クッソー、盗み聞きしやがってッ!」

富幸「別れる、人間と結婚なんて無理だッ!」

麗華「嫌ッ! まだ会ってもないのにッ!」

富幸「ダメだッ! お前の結婚相手はもう

決まってるんだッ! 三水(みみず)太郎の、

地味ミズ野郎の息子ってなッ!」

○ 宅配便の配送センター(夕方)

数人のマスク姿の配送員達が忙しそ
うに作業をしている。

そこへ戻ってきた軽トラからメガネ

姿の三水太郎(45)が降りてくる。

見た目は普通の中年男性だが一人だ

け半袖で胸には『三水太郎』の名札。

乱暴にマスクを剥ぎ取って疲れた表

情でその場を離れていく太郎の手首

にはブレスレットは無い。

○ 同・事務所(夕方)

固定電話が鳴り、マスク姿のセンタ

ー長(39)が受話器を取る。

○ 同・裏口(夕方)

うつむき加減で背中を丸めた太郎が座っていて、溜息交じりでコーヒーを飲んでいると腹が「ぐぐ」と鳴る。おもむろに足元の土に目を移す太郎。顔を上げ、周りを見て人がいないのを確認すると土を掴んで食べ始める。

太郎「(ビールっぽく) いやーキンキンに冷えててうめー。やっぱ仕事の後はコレだな」
そこへセンター長がやって来る。

慌てて土を投げ捨てる太郎。

センター長「(睨んで) いた。三水さん今度サボったら時給下げるって言ったろッ！」

太郎「(頭を下げて) す、すみません……」

センター長「電話だ、警察から」

太郎「え、ま、またっすか？」

センター長「てかなんでここに……ひよっとしてまた携帯止められてんの？」

バツが悪そうに顔を逸らす太郎。

○ 警察署・外観(夕方)

日暮れ時の都内の警察署の全景。

○ 同・ロビー(夕方)

焦り顔の太郎が小走りでやって来る。

そこへメガネ姿で汚れたTシャツを

着た三水(はじめ・70)を連れ

た女性警察官(37)がやって来る

が一の手首にもブレスレットは無い。

太郎「すみません、オヤジが面倒掛けて……」

警察官「(溜息) ……もう次は無いようにして下さいね。そうだ、はいコレ」

シワシワの銀行の封筒を渡す警察官。
警察官「返します。お父さんくれたけど」

封筒の中を見る太郎。中身は土だ。

太郎「す、すみません。何でも封筒に入れて人にあげちゃうもんで……」

警察官「そう……ではこれで」

呆れ顔で去って行く警察官。

太郎「駄目だぞオヤジ。勝手に出かけて……
それに人前で土食うな。通報されんだろ」

一「笑顔で太郎に）俺カツ井ね、刑事さん」
太郎「（溜息）……………さ、帰るぞ……………」

○ 公営団地・外観（夜）

明かりのまばらな古びた公営団地。

○ 同・三水家の居間（夜）

月明かりの差し込む狭い居間。

壁には『NO 土 NO LIFE』
と書かれた色褪せた古い色紙がある。

そこへ太郎と一が帰ってくる。

一は質素な仏壇に銀行の封筒を置く。

そこへ同じくメガネ姿で薄着の三水

花子（45）も帰ってくるが花子の

手首にもブレスレットは無い。

花子「もーお義父さん黙って外出たらダメッ

一」あ、味噌汁もお願ひします。婦警さん」

太郎「どこ行ってたんだよ花子。おかげで

またバイト早退扱いじゃねーか」

花子「（誤魔化し笑いで）……………ゴ、ゴメン。

ちよつと遠くまで買い物に行つてさ」

太郎「ハア？ なんだだよ」

花子「安かったの麦茶が、20円も」

嬉しそうな花子を見て呆れ顔の太郎。

太郎「しみつたれたこと言うな。明後日には

息子がお見合ひすんだぞ、社長令嬢と」

古びた棚の上に置かれた『御招待状

三水家様』の封筒を指さす太郎。

花子「ハア？ 旦那が非正規雇用者だから

だろが、しみつたれてる原因はッ！」

バツが悪そうに顔を逸らす太郎。

花子「……………でも、本当にいいのかね？ お見

合ひ相手がうちのバカ息子なんかで」

太郎「アイツと社長令嬢しかいねーんだろ、

今年20歳になるミミズ族は」

花子「まあすっかり減っちゃったもんね……………」

そこで一が仏壇から別の信用金庫の

シワシワの封筒を取って太郎に渡す。

ムツとして乱暴に突き返す太郎。

太郎「要らねーって、食いかけの土なんか」

一は無言で封筒を仏壇に戻す。

花子「てか向こうの奥様社長じゃないっしょ。

C……Cなんとか……CROだっけ？」

太郎「パチプロの王様みてーに言うなッ！」

花子「え、じゃあ何よ？」

太郎「知るか。それより俺等の滅亡の危機だ。

しきたりのおかげで生き延びてくれたけど」

花子「でも私はそのしきたりのせいで一緒に

させられたけどね、こんなダメ男と」

太郎「悪いのは俺じゃねー。人間だ、日本だ」

花子「ハア？ 何ソレ」

太郎「子供てるのに金かかり過ぎんだよ。

だから俺等も少子化になるんだ。日本死ぬ」

花子「保育園落ちた人みたいに言うなッ！」

一「突然立って）そうだ、それは違うッ！

ブレーキとアクセルの踏み間違いは老人

だけがやる訳じゃないッ！ 若者だって

やっぺんだッ！ そうだろ刑事さん達ッ！」

溜息交じりで見合う太郎と花子。

花子「お義父さん、その前に免許無いでしょ」

太郎「俺等は取れねーの。目悪いだろ」

何事も無かったかのように座る一。

呆れ顔で傍にあった一升瓶を手を取

る太郎。中には土が入っている。

太郎「金出してくんねーかな、施設入れる」

花子「向こうのご両親が？ いいね、ソレ」

太郎「アリだろ、花嫁の爺さんなんだから」

花子「じゃあ世話して貰ったら？ 仕事も」

太郎「ハア？ 俺のことはいーんだよッ！」

花子「なら私だけ仕事貰うわ。家政婦とか。

で、家族同然に豪邸に住み込んだりして」

太郎「なに韓国映画みてーな事言ってるんだよ」

花子「いーじゃん。親戚同士助け合わないと」

太郎「嫌だねッ、嫌みミズ野郎なんかとッ！」

呆れ顔で溜息をつく花子。

花子「いつまで引きずってんだか、昔の事」

太郎「うるせーッ、悪いのはアイツだッ！

傲慢で嫌みったらしい美瑞富幸だーッ！」

○ 路地（回想・夕方）

T『35年前』

少年A(10)と少年B(10)が

10歳の太郎の前に仁王立ちでいる。

少年A「おいミミズ太郎。昨日の掃除の時間

にお前に水掛けたろ。どうなったと思う？」

太郎「え……し、知らないよ」

少年A「チンチン腫れたんだよ。責任取れ！」

太郎「め、迷信だつてソレはッ！」

少年B「夜ジージーうるせーよ、ミミズッ！」

太郎「違うよ、それはオケラだよッ！」

太郎を棒でつつく少年Aと少年B。

そこへ10歳の富幸がやって来る。

富幸「やめろお前らッ！」

少年B「……なんだ、またミミズか」

財布から500円玉を取り出す富幸。

富幸「ほら、これやるから放してやれ」

お互い見合つて少し考える少年達。

少年A「……しょ、しょうがねーな」

苦笑いで500円玉を受け取って去

つて行く少年Aと少年B。

太郎「……あ、ありがとう、富幸くんッ！」

笑顔で富幸に駆け寄る太郎。

富幸(睨んで)「何笑つてんだ地味ミズッ！」

悔しくないのか？ 500円しかねーん

だぞお前の価値はッ！」

太郎「え……」

富幸「俺は将来パパみたいにならなりたいんだ。

金と権力さえあれば人間なんか全然怖くね

ーからな。そしたらお前も雇ってやるよ」

太郎「え、何でそんな欲深い事考えれるの？」

まるで人間みたいだ……」

富幸「な、なに？ 違う、一緒にすんなッ！」

太郎「きつと親が代々大企業の経営者だから

だね……でも雇って貰わなくてもいいよ。

どうせ土だけだし、欲しい物なんて……」

富幸「また卑屈になって……今度うち来いよ、

すげー美味しい土を食べさせてやるから」

太郎「え、ホントに？」

富幸「ああ、ご馳走してやるよ……500円

以上の価値のある土をよ……」

嫌みっぽくニヤけながら去って行く
富幸の背中を悔し気に睨む太郎。

○ 三水家・居間（夜）

昔を思い出し、鬼の形相の太郎。

太郎「クソッ！ 嫌みミズ野郎がッ！」

悔し気に一升瓶の土をラッパ飲み
する太郎。

○ 美瑞家・外観（夜）

明かりの灯る大豪邸の全景。

○ 同・麗華の部屋（夜）

麗華がソファアでスマホを見ている。

画面にはKAZU（20）が映って
いて楽し気にビデオ通話をしている。

麗華「……じゃあ、好きな色は？」

KAZU「んー、そうですね、水色かな」

麗華「えッ、私もッ！ また一緒ですねッ！

じゃあ、冷麺って好きですか？」

KAZU「あー嫌いっす。食感輪ゴムなんで」

麗華「ですよ、私も大っ嫌いです。じゃあ

ナウシカとラピエタならどっちが好き？」

麗華・KAZU「（同時に）ラピエタ」

KAZU「マジすかッ！ また一緒だッ！」

麗華「興味無いんで、土が汚れるとか」

KAZU「え、変わったところ気にしますね」

麗華「え、いや……じゃ、じゃあプリンは？」

瓶のヤツが好き？ それともカップ？」

KAZU「（笑って）何すかソレ」

麗華「い、いや特に意味は……」

KAZU「（考えて）……ま、カップかな」

麗華「ですよ。瓶の無駄な高級感苦手で」

KAZU「分かる。プリンは気楽に食べたい」

麗華「そー、てかメツチャ趣味合いますね」

KAZU「うん。じゃあ今度会いません？」

麗華「え、いいですよッ！ じゃあ出来れば

早いほうがいいんで、明日はどうですか？」

KAZU「え、急っすね」

麗華「ダメ……ですか？」

KAZU「いや、全然大丈夫っす。俺も早く会いたいんで」

満面の笑みの麗華だが「ぐぐ」とお腹が鳴り、思わず手で押さえる。

○ 同・ダイニング（夜）

誰もいない暗いダイニング。

周りをうかがいながらそくそくと入って来た麗華がフランス語が書かれた箱に入った瓶に手を伸ばす。

そこで突然電気が点く。

思わずビクッとなって振り返る麗華。

背後に居たのは……富幸だ。

富幸「……何してるんだ？ 麗華」

麗華「ちょ、ちよっと……の、喉乾いて……」

富幸「……食べに来たんだろ？ 土を」

麗華「え、ち、違うし……」

富幸「やっぱ無理だろ、人間と結婚するのは」

麗華「ち、違うって言うてるでしょッ！」

富幸「幸せになれないぞ、人間と結婚しても

不倫にDVにモラハラ……絶対無理なんだ、

一瞬の欲望さえ抑えられないバカな人間共

に永遠の愛を誓うなんてことはッ！」

麗華「そ、そんな悪い人ばっかじゃないし」

富幸「騙されるぞそんなじゃッ！ それに

泥を塗る事になるんだぞ、美瑞家の名に」

麗華「え、泥……？」

富幸「我々に大事な物は土だけ。我が民族は

ずっと『蔑まない、争わない、欲張らない』

の幸せを叶える三原則を貫いて土と共に生

きてきたんだッ！ だから欲まみれで泥臭

い心を持った人間と結婚したいとか言う奴

は要らんッ！美瑞家の名を汚すなッ！」

麗華「知るかッ、お見合いなんか絶対嫌ッ！

私は運命の相手と出会ったんだからッ！」

富幸「違うッ、それはお見合いの相手だッ！」

麗華「な、何それッ、勝手に決めんなッ！

お見合いなんか絶対、絶対行くかーッ！」

吐き捨てて飛び出して行く麗華。

富幸は困り顔で溜息をつく。

○ 同・外観（朝）

翌朝になり、大豪邸に朝日が当たる。

○ 同・富幸の書斎（朝）

PCの前にYシャツ姿の富幸がいるが下半身は短パンである。

ゆえにエアコンとストーブは全開だ。

大画面のPCモニターには数名の部下達が映っていて、リモート会議中。

富幸「……逆にコロナ特需に沸いてる会社だつてあるだろ、投資部門は見落とすなよ。幸か不幸か金融緩和のおかげで世界的に金

余り状態だからな」

投資部門の責任者が返事をする。

微笑むがすぐに真顔になる富幸。

富幸「……しかし外食部門は正念場だな……でも安心しろ、グループ全体で金も人も助け合うように指示してるからな」

涙声で返事をする外食部門の責任者。

富幸「……で、ホームセンター部門はどう？」

部下A（43）が話します。

部下A「はい、巣ごもり需要でガーデンング用の土がよく売れてまして、前年よりも園芸用品が大きく伸びています」

富幸「よし、なら次売り出すオリジナルブランドの土のししよ……（試食と言いかけるし、試作はこっちに任せておけよ）」

そこへ裸同然の汰嘉羅が入って来る。海パン一丁で富幸の背後を通過する。汰嘉羅の姿に気付いた部下達が驚く。

部下A「シ、CEO、今のはッ？」

咄嗟に振り返り、汰嘉羅を睨む富幸。

富幸「オ、オイ汰嘉羅ッ、入って来るなッ！」

汰嘉羅「あ、ゴメン、ママ」

部下A「（むらむらに驚く）マ、ママッ？」

富幸「あ……（画面外に誉があるふり）お、

お前外してくれないか？ 会議中だから」

部下A「あ、奥様いらっしやるんですね？」

富幸「あ、ああ……」

部下A「では是非ご挨拶を」

富幸「あ、いや、今出て行ったところで……」

部下A「そうですか、残念ですね」

富幸「いや……じゃ、じゃあ、続きを……」

思わず冷や汗を拭う富幸。

○ 同・玄関（朝）

マスク無しで半袖のサマーセーター

姿の麗華が靴を履いている。

そこへ誉がやって来る。

誉「麗華、今日はバイト何時まで？」

麗華「17時。でもその後初デートだから」

誉「そう……やっぱり付き合う気なの？」

麗華「当然でしょ。だって運命の相手だし」

誉「え、運命？」

麗華「ほぼ同じなの、好みとか価値観とか。

絶対嫌だから、自分と似た人じゃないと」

笑顔の麗華を見て眉を顰める誉。

麗華「え、何……？」

誉「私達も人間も皆違つて当然なのよ。自分と同じ価値観の相手としか愛し合えない者は互いに違う部分を見つけた途端に裏切られたと感じて憎しみ合うものよ。コレは差別の始まりと同じなの、人間の様に自分と似た者以外は受け入れられないって事はね」

麗華「え、いや、でも……」

誉（遮る）いい麗華、蔑みや欲や武器は滅

亡を呼ぶだけ。私達には希望を呼ぶ美味し

い土さえあれば生きていけるんだからッ！

麗華「い、嫌だつて言つてんの、ソレがッ！」

ムツとしながら出て行く麗華。

誉は心配気な表情のままうつむく。

○ 同・前の道（朝）

マスク無しの麗華が門から出て来る。

そこへマスク姿でジョギング中の中

年男（50）が通りかかる。

中年男「オイッ！ マスクしろよッ！」

麗華「ヒェッ！ す、すいません……」

睨みながら走り去る中年男。

麗華「こ、怖過ぎだって、マスク警察……」

○ 麗華のバイト先・外観

開店前のファストファッション店。

○ 同・店内

マスク姿の友人Aとマスク無しで半袖姿の麗華が開店作業をしている。

麗華「(腕をさすって) うー、寒みー」

友人A「だからそれじゃ寒いって言ったつしよ。マスクしたら？ 顔も温かくなるし」

腕をさすりながら首を振る麗華。

友人A「あ、ゴメン。体質的に無理だっけ」

麗華「そう。マジ困るわー、感覚過敏って」

友人A「てか……どう？ KAZUって男」

麗華「(ニヤけて) ……この後初デート」

友人A「え、マジでッ！ いいなー」

麗華「運命の相手だって、絶対に」

友人A「なにソレ。まだお互い誕生日も血液型も苗字さえも知らないくせに」

麗華「いーの。全部今日聞くから」

○ 同・バックヤード

主婦A(36)と主婦B(35)が

談笑しながら作業をしている。

そこへ主婦C(34)がやって来る。

途端に笑みを消す主婦Aと主婦B。

主婦C「……お、おはようございます……」

主婦A「(睨んで) ……なんで来てんの？」

主婦B「そう、休んでって言ったよね？」

主婦C「でも……私は陰性だったので……」

主婦A「のーこー接触者じゃん、旦那が」

主婦C「……な、なので私が働かないと……」

主婦B「名前なんだっけ？ 旦那の勤め先」

主婦A「クラストー薬局、じゃなかった？」

主婦B「(笑う) 違うし、でもそれサイコー」

悲し気にうつむく主婦C。

薄ら笑う主婦Aと主婦B。

○ 同・店内

引き続き話す麗華と友人A。

麗華「……てか家出よっかな、私」

友人A「え、マジでッ？」

麗華「で、同棲する。KAZUくんと」

友人A「嘘、本気で言ってるの？」

麗華「本気だよ。だからもつと稼がねーと」

張り切って服を派手に畳む麗華。

そこへ主婦Aと主婦Bがバックヤ-

ドから談笑しながら出てくる。

女性の店長(40)もレジカウンタ-

ーから出てくる。

遅れて曇り顔の主婦Cも出てくる。

店長「じゃ、朝礼しますねー」

○ 配送センター・作業場

山と積まれた宅配便の荷物。

そこで太郎が荷物を仕分けている。

太郎(荷物に気付いて)「……お、来た来た」

自分宛ての荷物を見てニヤつく太郎。

○ 麗華のバイト先・店内

朝礼中の麗華達。

店長「……ということでもコロナで売り上げが

厳しい状況ですから……残念ながら人員を

一名削減することになりました……」

主婦Cをチラ見する主婦Aと主婦B。

主婦Cは悲し気にうつむく。

友人Aは「誰？」と隣の麗華を見る。

全力で「私は嫌」と首を振る麗華。

店長「それから……今日から販促として全員

その新作のセットアップを着て貰います」

店長の指先には……長袖とロングパ-

ンツがセットになった服。

麗華「(目を見開いて)……ハ？」

店長「あと、第3波が近づいてますので今日

から全員マスクの着用が義務化されます」

途端に手を上げる麗華。

麗華「ハイ無理辞めます！ てか帰ります！」

思わず「え？」と顔を上げる主婦C。

友人A達も「へ？」と驚く。

○ 同・バックヤード

そそくさと荷物をまとめる麗華。

麗華「クッソー、稼がねーといけないのにー。
てか寒過ぎだって、もう耐えられねー」

体を震わせながらバッグから長袖の

カーディガンを出して着る麗華。

そこへ涙目の主婦Cがやって来る。

主婦C「み、美瑞さん……」

麗華「(振り返って) はい、何ですか？」

主婦C「私の為にありがとう、ゴメンね……」

涙を拭いながら頭を下げる主婦C。

麗華は「は……？」と怪訝な表情。

○ 軽トラの車内

道端に停車した車の運転席で自分宛
ての荷物を開けてニヤつく太郎。

太郎「へへ、奮発しちゃったぜ……これなら
アイツに嫌み言われることもねーだろ」

中には紙製の化粧箱が入っている。

○ 駅前広場

ブランド店の買い物袋を2つ提げた
マスク姿のKAZUがいる。

そこへ長袖のカーディガン姿でマス
ク無しの麗華が走って来る。

麗華「ゴ、ゴメンなさいッ！ 待ちました？」

KAZU「いえ、てか実物も可愛いっすね」

麗華「(照れて) え、そんな……」

KAZU「でも驚きました、時間早まって」

麗華「あ……迷惑でした？」

KAZU「いや、メッチャ嬉しかったっす」

麗華「ホ、ホントですかッ？」

KAZUは照れ笑いを浮かべながら
ポケットからマイ消毒スプレーを取
り出して手に吹きかける。

麗華「……え、ソレって自分用のですか？」

KAZU「はい。一応対策しなきゃと思って」

麗華「……あ、あの私マスク忘れちゃって

……す、すいません……(頭を下げる)」

KAZU 「……てかやめません？ 敬語」

麗華 「顔を上げて」 え……う、うん」

KAZU 「(微笑んで) じゃ、行こっか」

微笑み返してうなづく麗華。

○ 公園沿いの道

歩きながら話す麗華とKAZU。

KAZU 「……どんな字？ REIKAって」

麗華 「あ……麗は麗しい、で華やかな華」

KAZU 「凄いな、アニメの主人公みたい」

麗華 「よ、よく言われる……」

KAZU 「てか苗字は？」

麗華 「え、あ……(困り顔)」

そこへ向かい側からやって来た家族

連れの子供が麗華を見て指をさす。

子供 「あ、マスクしてないぞーッ！」

焦って思わず顔を伏せる麗華。

KAZU 「い、急ごっか。もうすぐそこだし」

麗華 「う、うんごめん……」

謝りながらもホッとした表情の麗華。

○ ケーキ店・前の道

『バスケットズケーキ専門店』の看

板の前には若者達の長い行列。

そこへ麗華とKAZUがやって来る。

麗華 「嬉しいッ！ 食べたかったんだーッ！」

KAZU 「え、マジで？ 俺も」

麗華 「ホント？ やっぱメツチャ好み合うね」

笑顔の麗華だが行列の人達が皆マス

ク姿なのに気付いて顔を曇らせる。

KAZUも思わずマイ消毒スプレー

を手に吹きかける。

麗華達が行列に並んだ途端に皆振り

返って白い目で見てくる。

麗華 「(小声で) う、うわ、ムリかも……」

KAZU 「だね……」

洪々行列から離れる麗華達。

麗華 「ごめんね、マスク忘れちゃって……」

KAZU 「じゃあ……コンビニ寄ってく？」

麗華 「え？」

KAZU 「買えばよくない？ マスク」
思わず「え……」と固まる麗華。

○ コンビニ

レジには購入したマスクを受け取る
曇り顔の麗華がいる。

麗華 「(舌打ち) しょーがねー、一枚脱ぐか」
上着を脱ぎ、半袖のサマーセーター
姿になりながらコンビニを出る麗華。
外で待っていたKAZUがまた消毒
スプレーを手に吹きかける。

KAZU 「ゴメン。もつと早く気付けばあの
ケーキ屋行けたのにね」

麗華 「ううん、私こそ……じゃあ、行こっか」

○ 橋の上

寒風が吹きつける川に架かる橋。
マスク姿の麗華とKAZUがベンチ
を見つけて座る。

麗華は寒そうに腕をさする。

KAZU 「……寒くない？ 半袖じゃ」

麗華 「う、ううん、大丈夫……」

KAZU 「そう……あ、そうだ、はいコレ」
2つ持っていたブランド店の袋の大
きめの袋を差し出すKAZU。

麗華 「え……なに？」

KAZU 「プレゼント。初デート記念の」

麗華 「えーッ、嬉し過ぎるんだけどッ！」

KAZU 「(微笑んで) 開けてみて」

笑顔で袋を開ける麗華……が、中身
は暖かそうな水色のロングコートだ。
思わず顔を引きつらせる麗華。

KAZU 「好きだって言ってたでしょ、水色」

麗華 「え、う、うん……」

KAZU 「着てみて」

麗華 「う、うん……(ためらう)……」

KAZU 「ほら、遠慮しないでいーから」

笑顔でコートを袋から出して麗華の
肩にかけるKAZU。

麗華 「(のけぞって) ちょ、ちょっと待って」

思わず息苦しい表情を浮かべる麗華。

KAZU「……え、どうしたの？」

麗華「だ、大丈夫。なんでもない……」

襟を広げ、首筋に空気が当たるようにして必死に耐える麗華。

KAZU「じゃあ、これも……」

もう一つの袋も開けるKAZU。

中身は……マフラーだ。

思わず「嘘ッ！」と目を見開く麗華。

KAZUは笑顔でマフラーを麗華の首筋にかけようと手を伸ばす。

麗華「も、もう無理ッ！」

咄嗟に手でマフラーを払いのけながら勢いよく立ち上がる麗華。その反動で肩にかかっていたコートが離れ落ち、橋の欄干を越えて川に落ちる。思わず「え……」と固まるKAZU。

麗華「……あ、ゴ、ゴメン。嫌な訳じゃ……」

気まずい沈黙の中、虚しく川に流されていくコートを見つめる二人。

KAZU「……そっか。怪しまれたよね……」

いきなりプレゼントなんか渡すから……」

麗華「え、ち、違うッ！ 違うのッ！」

KAZU「信用無いか、アプリで出会った男なんか……麗華ちゃん育ち良さそうだし」

麗華「い、いや、そんなことは……」

KAZU「……じゃあね」

KAZUは曇り顔でうつむき、肩を落としてその場から去って行く。

麗華「え……う、嘘でしょ……」

茫然と立ち尽くす麗華。

KAZUは人混みの中に消えて行く。

麗華「……そ、そんな……何で……ク、クソ、全部、全部コイツのせいだッ！」

涙目で勢いよくマスクを剥ぎ取り、

川に投げ捨てる麗華。

麗華「……何が……何が運命の相手だよ……」

流れていくコートを見つめ、滴り落ちる涙と共に膝から崩れ落ちる麗華。

○ 美瑞家・リビング（夜）

明かりの灯るリビングで薄着の富幸と誉と汰嘉羅がテレビでバラエティ番組を見て笑っている。そこへ泣き顔を腫らした麗華が帰って来る。

汰嘉羅「お、どうだった？ 初デート」

無視する麗華。

汰嘉羅「え……なに？ まさか別れたとか」

答えずにうつむく麗華。

汰嘉羅「（察して）え、マジか……」

気まずい沈黙。

麗華「……私……行くよ……明日のお見合い」

途端に「エッ？」と驚く富幸達。

富幸「ホ、ホントかッ？」

麗華「（うなづいて）……よく分かったから

……人間とは縁が無いんだって……私にはいないんだって、運命の相手なんか……」

富幸「……そ、そう良かった。安心したよ」

誉「……ホ、ホントにいいの？ 麗華」

麗華「……うん……じゃあもう寝るね……」

肩を落としたまま出て行く麗華。

○ 同・麗華の部屋（夜）

曇り顔の麗華がベッドに横になり、スマホのマッチングアプリを開く。

画面は『退会手続きのご案内』。

麗華「……何が運命の相手だ……嘘ばっか言

いやがって、嫌いだッ！ こんなもの作った人間なんて、人間なんて大嫌いだッ！」

勢いよく『退会』の表示を押して

スマホをベッドに投げ捨てる麗華。

そこへ「ぐぐ」とお腹の鳴る音。

○ 同・ダイニング（夜）

誰もいないダイニング。

そこへそくつと麗華が入って来て、フランス語が書かれた箱から土の入った瓶を取り出して開ける。

麗華「……ク、クソッ……なんでこんな、

こんな汚い泥なんか食べなきゃ……」

麗華は悔し気な表情で瓶を一度置く
がまたお腹が「ぐぐ」と鳴る。

溜息交じりに「何だよもう……」と
また瓶を取り、渋々土を食べ始める
が……暫くして急に手を止める。

麗華「……マズい……マジマズい……何で……

何でこの泥こんな最高に美味しいの……」

溢れ出てきた涙を拭いながら土を食
べ続ける麗華。

○ 同・リビング（翌日の午後）

晩秋の日差しが差し込むリビング。

時計は14時過ぎである。

高級スーツに身を包んだ富幸と誉、
高校の制服姿の汰嘉羅がいる。

汰嘉羅「……15時からだっけ？ お見合い」

富幸「もうハイヤー来るぞ。ホテル遠いから」

汰嘉羅「てかさ、ネクタイ外しちゃダメ？

息苦しいんだけど」

富幸「我慢しろ。相手の家族も来るんだぞ」

そこヘインターホンが鳴る。

富幸「お、ハイヤー来たな」

牛革のバッグを持ち上げる富幸。

そこへ綺麗な淡い水色のスーツ姿の

麗華が入って来る。

富幸「お……いいじゃないか、そのスーツ」

誉「……大丈夫？ 麗華」

麗華「うん、こうなったら思い知らせてやる」

誉「……え？」

麗華「絶対幸せになって見返してやるッ！

あのクツみてーな最悪のマツチングアプリ

作った嘘つきでバカな無能人間共にッ！」

富幸「そうだ、我々は下等生物とは違うッ！

さあ行くぞリッチチングハイヤーでッ！」

誉「（呆れて）また嫌み言って……」

勇んで玄関へ向かう富幸と汰嘉羅。

麗華も向かうが誉が麗華の肩を叩く。

麗華「（振り返って）……なに？ パ。パ」

誉はおもむろに虹色のブレスレット
を外して麗華に渡す。

誉「やっとあげることが出来るわ、麗華に」
麗華「え……」

誉「コレはね、私の家の長子が代々受け継いできたとつてもとつても大事な物なのよ」

麗華「……いい、いいの？ パパ」

誉「勿論よ。パパ嬉しいわ……麗華がお見合
いをする決心してくれて」

麗華「パ、パパ……」

誉「大切にして子孫に受け継いでいくのよ」
思わず涙目になり、うなづく麗華。

○ 同・前の道

門から美瑞家一同が出て来る。

待っていたハイヤーの運転手が頭を
下げるが……車は別の物である。

車を見てギョツと目を見開く富幸。

富幸「く、車がいつもと違うじゃないかッ！」

運転手「ええ。リモートワークが増えたよう
です。この機会に点検に出しまして。本

日は別の車をご用意させて頂きました」

誉「か、感染対策用の特注の仕切りはッ？」

運転手「え？ ございませんが……」

麗華「そ、そんな……」

運転手「ですので、第3波も迫ってますから
本日は皆様マスクをお願い致します……ア、
アレ？」

美瑞家全員マスクをしていないのに
気付く運転手。

運転手「あ、あの、皆様マスクは……」

富幸「それがな、全員体質的に出来ないんだ」

運転手「で、ではフェイスシールドとか……」

誉「無理なんです、それも」

運転手「え、じゃあ……お乗せ出来ませんが」
ドアに貼られた『マスク無しのお客

様の御乗車は御遠慮させて頂いてお
ります』という案内を指さす運転手。

富幸「そ、そんなッ、俺はCEOだぞッ！」

運転手「申し訳ございません。ご意見は契約
会社へお願い致します。では……」

頭を下げて車に乗り込む運転手。

麗華「マ、マジか……そんな……やる気になつた途端に……」

無情にも走り去って行くハイヤー。

汰嘉羅「……なんで無いんだよ、車の免許」

富幸「しよ、しようがないだろ、我々の視力じゃ無理なんだッ！」

誉「もしメガネがズレでもしたら即事故よ」

富幸「こ、こうなつたらバ、バスだ、バスで行くぞッ！」

○ バス停

バスを待つ数名の客が並んでいる。

そこへ美瑞家一同が小走りでやって来る。

先頭の客がマスク無しだと気付く誉
誉「だ、大丈夫そうね、バスは……」

息を切らしながら腕時計を見る麗華。
時間は14時半である。

麗華「ギリ間に合うか、これなら……」
そこへバスがやって来る。

ホッとした表情で運転手を見た麗華
の顔が一瞬で引きつる。

運転手はマスク警察の中年男だ。

麗華「ヤ、ヤバッ！ 警察だッ！」

汰嘉羅「え、どこ？（キョロキョロ）」

バスが停車し、乗り込む先頭の客。

中年男「（マイクで叫ぶ） 乗れませんよッ！
マスク無いとッ！」

麗華「や、やっぱりか……」
誉「む、無理そうね、バスも……」

悔し気な表情でバス停から後ずさり
する美瑞家一同。

扉が閉まり、勢いよく発車するバス。
富幸「ク、クソッ！ 何でこんな事にッ！」

麗華「どうすんの？ お見合い行けないじゃ
んッ、これじゃ一生結婚出来ないってッ！」

誉「い、いえ、何か方法はあるはずよ」

汰嘉羅「無理じゃね？ これじゃ地下鉄とか
も同じっしょ。もう間に合わねーって」

麗華「そ、そんな……」

そこへ背後から「ミミズによるよ
ろ……」と早口言葉が聞こえてくる。
思わず振り返る麗華……声の主は自
転車に乗った釣具屋の店主だ。

それを見てハッと思いつく麗華。

麗華「シエ、シエアサイクルはッ？」

誉「え、なにソレ？」

麗華「スマホのアプリ使って好きな時間と場
所に返せる自転車があるのッ！」

富幸「よ、よしッ！ ソレ使って行くぞッ！」

○ シエアサイクル置き場

シエアサイクルが何台も並んでいる。

そこへ息を切らした美瑞家一同が小
走りでやって来る。

富幸「おお、いっぱいあるじゃないかッ！」

急いでスマホのアプリを開く麗華だ
が『感染予防の為現在は利用を停止
させて頂いております』という表示。

麗華「(ガッカリと)お、終わった……」

力無くスマホを皆に見せる麗華。

思わず愕然とする富幸達。

腕時計を見る麗華。15時前である。

麗華「うわ15時ッ！ マジで終わった……」

富幸「あ、諦めるなッ！ は、走るぞーッ！」

慌てて駆け出す富幸。

○ 大通りの歩道

小走りで急ぐ美瑞家一同。

ネクタイをした富幸と汰嘉羅は一際
息苦しそうである。

汰嘉羅「く、苦しい……マジ無理ッ！」

ジャケットを脱ぎ、ネクタイも緩め
る汰嘉羅。

富幸「ホ、ホテル着いたら着るんだぞッ！」

富幸もネクタイを緩める。

麗華は走りながら汗を拭う。

麗華「ねえ、こんな顔じゃ絶対嫌だッッ！」

延期、延期して貰おうよッ！」

富幸「駄目だッ！ 絶対今日じゃないとッ！」

麗華「またしきハラかよッ！ もー嫌ッ！」
誉「遅れるって伝えたほうがよくないッ？」

走りながらスマホを取り出す富幸。

『三水太郎』の画面表示。

『発信』を押す富幸だが……『この電話はお客様の都合により……』の音声案内。

富幸「エッ！ う、嘘だろッ？」

○ ホテル・外観（夕方）

西日の当たる高級ホテルの全景。

○ 同・エントランス（夕方）

汗だくの美瑞家一同がやって来る。

ネクタイを直しながら走る富幸。

富幸「た、汰嘉羅、ジャケット着ろッ！」

渋々着る汰嘉羅。

そこへベルボーイ（25）が来る。

ボーイ「あの、お客様、マスクは……？」

富幸「え、あの、ちよつと体質的に……」

ボーイ「では、フェイスシールドなどは？」

誉「ムリなんです、それもッ！」

ボーイ「では……お通し出来かねますが……」

富幸「なにッ？ 予約してる客だぞッ！」

ボーイ「申し訳ございません。他のお客様の

ご迷惑になりますので……」

麗華「大丈夫ッ、誰も感染してないからッ！」

ボーイ「いや、そう言われましても……」

富幸「通してくれッ、滅亡の危機なんだッ！」

ボーイ「へ、め、滅亡？」

麗華「お願いッ！ 行かないと一生結婚出来

ないのッ、絶対今日お見合いしないとッ！」

ボーイ「え？ な、何言って……」

汰嘉羅「や、やっぱダメだ息苦しいッ！」

勢いよく制服を脱ぎだす汰嘉羅。

ボーイ「エエッ！ け、警察呼びますよッ！」

富幸「じゃ、じゃあこうすればどうだッ！」

咄嗟に片手で鼻と口を覆う富幸。

思わず「え……」と固まるボーイ。

富幸「ほら、お前達もッ！」

麗華達も富幸に続く。

富幸「防げばいいんだろッ？ 飛沫をッ！」
ボーイ「え、ええ、まあ……」

○ 同・お見合い会場（夕方）

立派な長テーブルのある豪華な部屋。
時計は16時前である。

美瑞家一同が駆け込んで来て鼻と口
を覆った手を離すが三水家はいない。

誉「え……お、怒って帰ったとか……？」

麗華「そ、そんなッ！」

汰嘉羅「しよーがないよ、もう16時だし」

麗華「ウ、ウソでしょ……」

そこへ紙袋を提げた太郎と一が汗だ
くで駆け込んで来る。二人共袖を捲
ったヨレヨレのジャケット姿で同じ
様に片手で鼻と口を押さえている。

汰嘉羅「あ、やっぱそうなります？」

太郎「（手を離す）悪いな、遅くなって……」

富幸「携帯どうした？ 何回もかけたんだぞ」

太郎「ちよ、ちよっと色々あつてな……」

バツが悪そうに袖で汗を拭う太郎。

富幸はハンカチを差し出す。

富幸「これで拭けよ。どーせ持っていないだろ」

太郎「ハ？ 変わらねーな、嫌みっぽいのは」

富幸「なに？ お前も相変わらず地味だな」

太郎「な、なに……」

睨み合う富幸と太郎を怪訝な表情で

見つめる麗華。

誉「あ、あの……奥様とご長男様は？」

太郎「今向かってる。もうすぐ来ますから」

富幸「そうか……（麗華を指して）……太郎、

この娘が麗華だ」

麗華「初めまして麗華です。よろしくお願い致
します（微笑んで頭を下げる）」

太郎「よ、よろしく……（照れ笑い）と、富

幸、可愛い娘じゃないか。ママ似かな？」

富幸「（照れて）そ、そうかな……」

太郎「（気付いて）あ、お前そうだったな。

てか紛らわしいんだよッ！」

富幸「な、なんだとッ！」

誉「ま、まあまあ……それより座りませんか？」

両家共座るも気まずい沈黙が続く。

誉「(おもむろに外を見て)……ホ、ホント

今日は良い天気で良かったわねえ、麗華」

麗華「え、そ、そうだね」

誉「そういえば……私達のお見合いの時もね、

ちようどこんなお天気でねえ。思い出すわ

……椿の花が綺麗でねえ……ってアレ？

この時期に咲き始めるのはサザンカだった

かしらあ？ いや、やっぱり椿？ どっち

だったかな？ そうそう寒椿っていうのも

あったわねえ。でも大川栄策の歌って……」

一「(突然立って) コレだッ！ ほら女性が

いるとやっぱり会議が長くなるだろッ！」

ギョツと驚く美瑞家一同。

太郎「オヤジ、この人は麗華ちゃんのパパだ」

何事も無かったかのように座る一。

太郎「(誤魔化し笑いで) ハ、ハハ……じゃ、

じゃあまず結納品を……」

富幸「そ、そうだな……」

苦笑いを浮かべながら牛革のバッグ

から風呂敷包みを取り出す富幸。

太郎も紙袋から紙製の化粧箱を出す。

富幸が風呂敷を外すと高級そうな桐

箱の中には瓶に入った土がある。

太郎の箱の中身はカップに入った土。

太郎「ず、随分高級そうな土じゃねーか……

で、でも味は負けてねーからな」

勢いよくカップを一つ開ける太郎。

汰嘉羅「(途端に鼻をつまむ) く、臭ッ！」

麗華「(焦って) そ、そんなこと無いでしょ」

汰嘉羅「いや臭いッ、Bランクの臭いだッ！」

誉「や、やめなさい、汰嘉羅ッ！」

思わずムツとする太郎。

富幸はフン、と鼻で笑う。

富幸「たまにはいーかもな、B級グルメも」

太郎「な、なにッ？ 黙れ嫌みミズッ！」

富幸「なに、それヤメろ、地味ミズッ！」

また睨み合う富幸と太郎。

麗華「ちよつとママやめてッ！ お義父さん、私好きですよ、瓶よりカップのほうがッ！」

太郎「いーよ、そんなお世辞言わなくても」

富幸「フン、相変わらず卑屈だな」

太郎「な、なんだとッ、卑屈にもなるわッ！

人間共が環境破壊で汚しに汚しまくったB

ランク以下の土ばつか食ってりやなッ！」

富幸「だったらAランクのこの土を食べろ。

わざわざフランスから取り寄せたんだぞ」

太郎「知ってるわッ！ お前の家にソレ届け

たの俺だからなッ！」

富幸「なに？ お前配達業営んでるのか？」

太郎「ハア、営んでる？ バイトだよッ！」

富幸「なに？ ダメだッ！ 明日にでも俺の

会社に来いッ！ 正社員で雇ってやるから」

太郎「ハ？ なんだよソレッ！」

富幸「バイトじゃ困るんだッ、お前は麗華の

義理の父親になる男なんだからなッ！」

太郎「い、嫌だねッ！ てか変わってねーな

お前はッ！ 10歳の時からずとッ！」

富幸「な、なにッ？ 変な意地張って……」

途端に遮るように立ち上がる太郎。

太郎「NO 土 NO LIFEッ！ お前

は忘れたのかッ？ 俺達は土さえあれば生

きていけるんだッ！ 人間みてーに欲を満

たす金を稼ぐ為に身を削って働いて、競争し

て、疲れて、息苦しくて、傷つけ合って殺伐

とした生活送るのは御免だッ！」

富幸「な、なに言って……」

太郎「だってそうだろッ！ 差別や格差社会、

誹謗中傷で心を傷つけ合って、戦争で体も

傷つけ合って、環境破壊で自分達の住む地

球まで傷つけてッ！ 卑劣で野蠻で強欲な

人間共は欲の赴くままに生きた結果自分で

自分達の首絞めてんだッ！ コロナだって

飛行機で世界中にバラ撒いたんだ、自業自

得じゃねーかッ！ 俺達も滅亡しちまうぞ、

地球上でウイルスへの免疫力は最も弱いく

せに欲望だけは最も強い醜悪な下等生物の

人間共の価値観に染まってるとなーッ！」

富幸「な、そ、それはただの現実逃避だッ！」
太郎「な、なにい？」

富幸「言い訳だ、お前みたいな怠け者のッ！」
太郎「へへ……すっかり人間社会に染まった
ようだな、そうして弱者を否定して見捨て
るとこみると。先祖様達が泣いてるぞ」

富幸「なにい。は、破談だ、お見合いはッ！
こんな怠け者で無礼な奴のところへ大事な
娘はやれんッ！」

麗華「エエッ！ ママ、嘘でしょッ？」

富幸「嘘じゃないッ！ 元々嫌だったんだろ、
お前だってッ！」

麗華「何今更言ってるのッ？ もう決めたん
だから、結婚して幸せになるんだってッ！」

富幸「ムリだッ！ こんな家の嫁じゃッ！」

麗華「ひ、ひどいッ！ 勝手過ぎるッ！」
誉「そ、そうよ。うちは汰嘉羅がいるからま

だいいけどあちらは一人っ子じゃないッ！」

太郎「……ああ、滅亡だな、我が三水家は」

麗華「え……マ、マジで滅亡……そんな……」

そこへドアが開き、遅れていた花子
が何故かマスク姿で駆け込んで来る。

花子「すいません遅れてッ！（振り返って）

ほら、一男(かずお)早く来なさいッ！」

同じくマスク姿の三水一男が入って

来る……が、一男はKAZUだ。

(手首にブレスレットは無い)。

途端に息を飲んで驚き合う麗華と

KAZU。

麗華「……え、か、KAZUくん……」

KAZU「れ、麗華ちゃん……」

花子「え……なに、知り合いなの？」

固まったままうなづく二人。

KAZU「………そ、そうだったんだね。

だから、だからあの時コートを……」

麗華「う、うん……で、でもマスクはッ？

何で、何で長袖の服着てて出来るのッ？」

KAZU「あ……コレのおかげだよ」

ポケットからマイ消毒スプレーを

取り出すKAZU。

麗華「え、で、でもソレって……」

ニヤリと笑ってスプレートのラベルを剥がすKAZU。

ラベルの下にあったのは……『酸素スプレー』の文字。

麗華「あ……」

KAZU「ミミズ族なのがバレないように作ったんだけど……要らなかつたとはね」

苦笑いでスプレーを眺めるKAZU。

KAZU「……でもマジで嬉しいんだけど。まさか麗華ちゃんが俺のお見合いの相手だったなんて」

満面の笑みのKAZUだが太郎は

バツが悪そうにうつむく。

太郎「い、いや、一男それがな……」

KAZU「え、なに？」

麗華「ちよつと待って下さいお義父さんッ！」

慌ててKAZUに駆け寄って腕を掴み、太郎に頭を下げる麗華。

麗華「お願いしますッ！ このまま、このままお見合いを続けさせて下さいッ！」

太郎「え、で、でも……」

困り顔で富幸を見る太郎。

富幸「ダメだ麗華ッ、絶対許さんぞッ！」

麗華「お願いママ、続けさせてッ！ てか滅亡させる気？ 同じ、同じミミズ族をッ！」

富幸「……ん、そ、それは……」

思わずうつむき、悩み始める富幸。

麗華「ママ言ったよね？美瑞家の名に泥を塗るなってッ！ だから私ミミズ族の滅亡を防ぐ為にKAZUさんと結婚するッ！それでミミズ族同士蔑まず、争わず、欲張らず、土と共に生きて幸せになるからッ！」

富幸は苦悶の表情で悩む。

麗華「お見合いの相手なんだよねッ？ 私の運命の相手はッ！ そう言ったでしょッ！ だったらお願いッ、続けさせてーッ！」

富幸はためらいながらもうなづく。

麗華「や、やったーッ！」

思わずKAZUに抱きつく麗華。

KAZUも笑顔で麗華を抱き締める。

麗華「……………てか……………一男だったんだね、名前」

KAZU「あ……………地味だっと思ってたでしょ？」

麗華「(微笑んで)……………うん、だから嬉しい」

KAZU「……………え？」

麗華「本当にいたから、運命の相手が……………」

KAZUの胸に顔を埋めて幸せそう

な笑みを浮かべる麗華。

誉「……………う、運命の相手って、ひよつとして

彼がマッチングアプリの……………」

抱きつきながらうなづく麗華。

バツが悪そうに顔を見合わせる富幸

と太郎に誉が近づいて微笑む。

誉「……………救われたようね滅亡の危機を、下等

生物の人間が作った高等文明のアプリに」

抱き合う麗華とKAZUの幸せそう

な姿を見て笑顔を取り戻す一同。

○美瑞家・外観

T『3週間後』

冬の日差しを浴びる大豪邸の全景。

その庭にある立派なもみの木には

華やかなクリスマスツリーの飾り

付けが施されている。

○同・麗華の部屋

パソコンの前に麗華がいる。

PC画面には不機嫌そうな表情の

大学教授の盛岡が映っている。

盛岡「……………どういことだ？ 全く同じ内容

のレポート再提出してくるなんて」

麗華「……………真実ですから、それが」

盛岡「(鼻で笑って) 真実？ 神風が宇宙人

の仕業ってのが？ 何をバカな……………」

麗華「(遮る) それと盛岡教授と違って私は

大当たりだと思ってますから、苗字ガチャ」

盛岡「(驚いて) え、な、何でソレを……………」

麗華「あと、結婚して苗字を変えたいとも

思いません。てかミミズのままですから、

私は。いえ私達は。ずっと、ずっと……………」

横を見て微笑む麗華。傍にあるソファーには……KAZUが座っている。幸せそうな笑顔で見つめ合う二人。麗華の机にある卓上カレンダーの12月25日の欄には大きな©印。

○ ブランドショップ・外観
繁華街にある高級店の全景。

○ 同・店内
クリスマスのBGMが流れる店内。デジタル時計の日付は12月25日。広い試着室の前には見慣れぬマスク姿の美瑞家と三水家が揃っている。

富幸「……大丈夫か？ パパ」
誉「す、少し息苦しいかも、ママ……」

太郎「紛らわしいな、相変わらさず」
花子「やめてよ、失礼でしょ」

KAZU「お義母さん、どうですか？ ソレ」
富幸「凄いな。この手があったとは……」

太郎「思いつかねーだろ、金で解決するしか
脳の無い嫌みな成金野郎には」

富幸「な、なに……」
例のごとく睨み合う富幸と太郎。
そこへ試着室のカーテンが開く。

中には川に落ちたモノと同じ水色の
ロングコートを着たマスク姿の麗華。
KAZU「……良かった……似合ってるよ」

麗華「(照れて)……そ、そう？」
花子「すいませんね、お金出して頂いて」
富幸「いえ、娘が悪いんですから。一男くん

がバイトでコッソツ貯めたお金で買って
くれたコートを川に投げ捨てるなんて」
麗華「だから、ワザとじゃないって」

誉「まあまあ……麗華、息苦しくない？」
麗華「うん、大丈夫……」

微笑んでコートを脱ぐ麗華。
中には麗華が欲しがっていた純白で
長袖のウエディングドレス。

思わず感嘆の声を上げる一同。

麗華は手にスプレーをかけて微笑む。

麗華「……KAZUくんありがとね……この
ウエディングドレス着る夢叶えてくれて」

満足気に微笑み返すKAZU。

そこで一が突然バツと立ち上がる。

思わずギョツと驚く一同。

太郎「……ど、どうしたオヤジ……？」

一は無言で部屋の仏壇にあった信用
金庫のシワシワの封筒を麗華に渡す
と何事も無かったかのように座る。

太郎（呆れ顔で）おいオヤジ、こんな時に
いつもの土かよ……ゴメンな麗華ちゃん」

麗華「い、いえ……」

苦笑いで封筒を開けてみる麗華。

中から出てきたのは……年代物の

虹色のブレスレットだ。

思わず「エッ！」と驚く富幸と誉。

富幸「ま、まさかソレはッ！」

誉「い、ご先祖様がずっと探してた……」

麗華は自分の手首のブレスレットと
見比べてみる。

麗華「い、一緒だ、コレと……」

誉「麗華、繋げてみたら？」

麗華「え？ 繋げるって……？」

富幸「それはな、ご先祖様が持っていた元々
一つのネックレスだったんだぞ」

麗華「え、そ、そうなの……？」

太郎「おいオヤジ、そんなの初耳だぞッ！」

一は無言で遠くを見つめるだけ。

麗華は手首からブレスレットを外し
て繋ぎ合わせる……と、1本の虹色
のネックレスが出来上がる。

麗華「ホントだ……架かった……一本の虹が」
KAZU「じゃあ、着けてあげるよ」

麗華にネックレスを着けるKAZU。
純白のウエディングドレスに映える
虹色のネックレス。

KAZU「……綺麗だよ、麗華ちゃん」

麗華「……ホント？ ありがと」

幸せそうに微笑む麗華を見た一同の表情も自然と緩む。

太郎「急に真顔になって）……で、でも、

本当にいいのか？　こんな学歴も貯金も何の才能も無いダメ息子で。バカにされねーか？　心の醜い人間共から格差婚とかって」

花子「な、何よ、こんなおめでたい時に」

太郎「いや……それに麗華ちゃん学生だろ。

今時学生結婚なんて珍しいからSNSとかで詮索されて……ソレが原因で素性がバレでもしたら……きつとネットを通じて世界中の人間共から酷い差別と誹謗中傷を……」

富幸「……十分あるだろな、その可能性は。今の時代ならでは昔よりも酷い迫害が」

途端に顔を曇らせてうつむく一同。

麗華も不安気にうつむく。

KAZU「……大丈夫ですよ、僕らの間にはいつも虹が架かっているから」

思わず「え？」と顔を上げる一同。

麗華「ど、どういうこと？　KAZUくん」

KAZU「……確かに嫌な事はあるかもしれない……でも、その後には必ず幸せな事が待ってるはずだ。だって雨が降らないと出ないだろ？　綺麗な土を泥に変えてしまう雨の終わりを告げる僕らの希望の虹も……」

真つすぐな目で虹色のネックレスを見つめるKAZU。

思わず「そうか……」と見合う一同。

虹色のネックレスを見つめる麗華の表情も徐々に緩んでいく。

麗華「……そうだね、きつと大丈夫だね」

KAZU「うん、幸せになろう、麗華ちゃん」

麗華「うん、よろしくね。運命の相手の……一男くん」

幸せそうな笑顔で抱き合う二人。

それを約750年越しに再び出会う、

昔のままに仲良さ気に見守る美瑞家

と三水家一同をクリスマスソングが

優しい気に包み込む。(※バイト君の

想像終わり)

○ 釣具屋・外観

都内の商店街にある釣具屋の全景。
店先には紅葉の眩しい街路樹がある。

○ 同・店内

語り終えたバイト君の前には満足気に微笑む店主がいる。

バイト君「……って感じの物語はどうすか？」

店主「いーじゃねーか。しかしミミズのヤツ

ホントおもしろい特徴色々持ってたんな」

バイト君「ですね。お陰で楽しかったっす、物語作るの」

店主「だろーな。でも真面目な話……確かに

人間はコロナの被害者だけど世界中に広めた加害者でもあるって思ってたんだろーな、

コロナとは無縁で肺も無ければ土を欲する

以外の欲も無いミミズ達からしたら」

バイト君「ですね。コロナだっってここまで広げる気は無かったかもしれないっすからね」

店主「だな……なんか色々教えられる気がすんな、ミミズ達に」

バイト君の手にしたミミズの箱を感慨深気に見つめる店主とバイト君。

店主「……っつかそれよりもなんで俺は1回

しか、しかもチャリで通りかかるだけの出

番しかねーんだよ」

バイト君「え、出ただけ感謝して下さいよ。

てかいつも変な早口言葉ばっか言ってるのが悪いんっすよ。合わせてびよこびよこ、

とかって」

店主「だ、だからソレはカエルだっってッ！

カエルッ！ ミミズじゃねーッ！」

2020年11月、一向に先の見通

せない不安に包まれたままのコロナ

禍の東京においてささやかだが平穩

なひと時が流れる釣具屋の窓越しに

見える街路樹の紅葉には晩秋の暖か

で優しい気な日差しが降り注いでいる。

【終】